

中国海軍ニュース：中国が国産空母 2 艘目の設計を完了

漢和防務評論 20180106(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国は、002 大連空母の艤装を急ぐとともに、上海で建造される 2 艘目の国産空母の設計を完了させました。KDR は 2019 年までに着工すると見えています。2 艘目はスキージャンプ方式ではなく、蒸気カタパルトを採用すると予測しています。

蒸気カタパルトの設計は、ウクライナの支援があった、と KDR は推測しています。J-15 艦載機は蒸気カタパルト発進方式に適合するように前脚の強度を高めるよう設計し直している、と KDR は推測しています。

これは完全な推測ですが、J-15 が衛星写真で見当たらないのはそのためでしょうか？ そうだとすれば、中国は信頼できる蒸気カタパルトの製作に自信を持ったということです。

KDR 香港平可夫特電：

中国の権威筋は、国産空母 2 艘目の設計を完了した、と述べた。これは、上海で建造される国産空母 2 艘目の全ての設計図が完成し、正式に建造が開始されることを意味する。少し前に、中国の軍人学者が中国中央テレビで、2 番目の空母はすでに 1 年前に建造に着手した、と述べたが KDR が確認したところ、これは事実ではなかった。上海江南造船所は、日夜国際メディア、外国情報機関の” 厳重な監視下 ” にあり、1000 個に近い関連企業、関係者が数万人規模の ” 大型特種船舶建造プロジェクト ” を秘密にすることは事実上不可能である。2、3 年前 (2014 年 12 月)、KDR は次のように報道した：2 番目の空母は動力系統が大きくなり、蒸気カタパルトを採用する。したがって設計図は何度も書き換えられ、未だ完結していない、と。2 番目の空母は従来型の動力系統である。KDR がソ連空母 ULIYANOVSK 号の建造過程を説明した際に、相当詳細に核動力空母を分析した。核動力の採用は簡単ではない。造船所の設備を大きく改造しなければならない。原子炉、核燃料の貯蔵、運搬に関して、一連の技術的手順を踏む必要があり、現在の江南造船所にはこのような設備の建設は見られない。興城 (遼寧省) には、確かに 2 セットのカタパルトが建設されている。外形から見ると、電磁カタパルト、蒸気カタパルトとも実験段階のようだ。2014 年 12 月以前の構想は依然として蒸気カタパルトを採用していた。最新の分析によると、興城基地には地下弾薬庫が建設され、4 個の出口を有することがわかった。

結局ウクライナは、中国の空母設計を支援したのであろうか？最近多くの消息筋は：空母ワリヤグの主任設計師がかつて中国に渡った、という。これは秘密でも何でもない話だ。ウクライナの国家武器輸出入総局内部には中国担当課がある。その中に専門グループがあり、空母建造に関する各種諮問に応じてい

る。これは **KDR** がすでに報道している。しかし官の機構は中国空母の設計に関して直接は介入していない。このほか、相当多くのウクライナ民間軍事技術者が 1992 年から”双引工程”の名目で招聘され中国で仕事をしている。内容は中国空母のボイラー設計や蒸気タービン関連技術の支援等等である。**KDR** は何度も報道している。それがなかったならば、中国、北朝鮮の軍事工業の進歩は、これほど速くはなかった。

以下の記録を見てほしい：

KDR は、ウクライナの国家特種装備輸出入総局中国課を取材した。同課は全ウクライナの対中国軍事協力全般を所掌している。同課の課長は若く将来性のあるアンドロソフ氏（数年前に取材した）で、空母を担当していた。彼は **KDR** に次のように述べた：私は責任を持って再度貴方方に申し上げたい。我々の会社は、中国国産空母の設計、建造に関与したことはない、と。これは彼ら（中国）の国家機密なので、我々が直接関与することなど出来るはずがない、と。

KDR: ”直接ではない関与 ”があったのではないかと？私は、貴方のグループと中国の空母担当グループとの間で交流があったと聞いている。

アンドロソフ：私は繰り返すが：我々は、中国国産空母の設計、建造に関与したことはなく、ワリヤグの設計図を中国に渡したこともない。一部の事業において、確かに我々は諮問に対し意見を述べたことはあったが、あくまで意見を述べただけである。

彼の説明は、基本的には正しいだろう。ウクライナは、一部の開発プロジェクトで諮問に対し意見を述べただけであった。しかしこの意見が極めて重要なものは明らかだ。この意見がなければ、中国は寄り道を繰り返したはずだ。

中国の権威筋は **KDR** に次のように述べた：艦載戦闘機、早期警戒ヘリだけでなく、艦載大型無人機も、しかも蒸気カタパルトの採用にも意見を求めた、と。蒸気カタパルトを採用するならば、スキージャンプ甲板は必要ないのか？**KDR** は武漢の黄家湖新区の空母模型を再度研究した。その結果、2016 年 7 月から甲板と早期に取り付けられていた上層に建設されたレーダーの模型が外されているのがわかった。このことから 2 番目の国産空母はスキージャンプ甲板を採用しない可能性がある。これは中国が、自ら設計した蒸気、電磁カタパルトに一定程度の自信を持っていることを示している。**ULIYANOVSK** 核動力空母の建造を分析した論文の中で、**KDR** 及びその他のロシアメディアは何度も分析している：ソ連は、自ら設計した蒸気カタパルトに自信がもてないので、蒸気カタパルトとスキージャンプを同時併用した、と。

再度武漢の陸上にある空母の上層建築を見る。2017 年 3 月以前ははっきりしない。7 月以降、逐次明らかになった。**KDR** の推測によると、レーダーシステム、作戦指揮系統全体は、055 ミサイル駆逐艦からの移植である。2 バンド、2 種類のアクティブ・フェーズド・アレイ・レーダーを採用、これは S バンドと X バンドの可能性が極めて高い。これは、空母自身が多くの艦対空ミサイルを搭載することを意味しない。空母は艦隊の指揮センターとして、そのレーダーシス

テムが他の防空駆逐艦に空中情報を提供する。或いは目標を直接指示する。この他、大連空母が使用するロシアの FREGAT 型 3D レーダーは取り消されている。052D にも取り付けられていない。

Y-7 輸送機を改装した KJ 早期警戒機は 7 月以降、武漢の陸地空母上に出現した。同機は搭載されるであろう。この他、J-15 は依然として模擬甲板上にあった。このように見ると、2 番目の国産空母は、J-15 を搭載した蒸気カタパルト型である。J-15 は前脚の強度を高めて試験中である。この部分の設計は中国が自ら行ったものだ。なぜなら、SU-33 の蒸気カタパルト型は設計図が完成しただけであったから。蒸気カタパルト装置は、ウクライナの SAKI 試験飛行センターに設置された。その後ソ連が崩壊した。中国は、蒸気カタパルトの設計図を、ウクライナを通じて獲得したのだろうか？可能性は高い。

このことは、たとえ同じ J-15 を搭載したとしても、大連空母と上海空母では配備方式が異なり、戦力も完全に異なる。大連空母では搭載燃料、搭載武器に極めて大きな制限を受ける。

以上が中国が SU-33 の複製を決定した主な理由である。最初から、蒸気或いは電磁カタパルト型空母を建造するために準備していたのである。ソ連は当初同じように考えていた。したがって SU-33 の搭載弾量、搭載燃料制限は、欠点ではなく、暫定的なものと考えていた。3 番目の ULIYANOVSK は、蒸気カタパルトを使用するはずであったが、残念ながらその日は来なかった。

一般状況下では、空母の建造は、最初、鋼板の切割から開始される。KDR は、2 番目の国産空母の建造は 2019 年以前に上海で開始される可能性が極めて高いと考える。

中国の空母建造の歴史を見る：2010 年 8 月 13 日、KDR は武漢で空母の実物大模型を発見した。大連空母の鋼板の切割は 2013 年の夏である。進水は 2017 年 4 月 26 日、このように分析すると、3 年以内に 2 番目の国産空母建造が上海で開始されるであろう。これは相当控えめな推測である。實際上、2 番目の空母建造に当たり、中国は、すでに 1 番目で一定の経験を得ている。上海江南造船所、大連造船所が 2 つの大集团公司に所属し、競合関係にあるとしても、米国の私企業間の競合とは完全に異なる。中国の各集团公司は依然として協力関係にあり、空母は、北方造船重工集団の同じ研究所で設計される。

2 番目の空母の基地になる海南島三亜基地は、現在突貫工事中である。主停泊位置はすでに決まったが、弾薬庫、司令部、将校宿舎、パイロット宿舎、レーダー施設は未完成である。青島（遼寧省）の空母基地の建設規模から類推すると、海南島の 2 番目の空母基地完成までには、少なくともあと 2 年は必要であろう。大連造船所は、3 年半で 1 番目の空母の船体を建造した。KDR は、上海の 2 番目の空母も同様の速度で建造されると推測している。言い換えれば、2019 年に建造開始、2022 年に船体完成、2027 年前後に就役する。そのとき、中国海軍は、2 個空母戦闘群とさらに 1 個訓練空母戦闘群を保有することになる。

上海の長興造船所では、2017 年 2 月、2 艘の 055 ミサイル巡洋艦の分割建造が完了し、まさに合体しようとしていた。想像を絶する建造速度である。2016 年 12 月 8 日、2 艘目の 055 の船台には一個の分割部分が存在するだけであったが、

2ヶ月の間に室内で全ての分割部分を完成させたのであろうか？

時々刻々、関心が高まる第3号ドックは、2番目の国産空母の製造場所になるはずである。2017年2月には、1艘の民用大型液化天然ガス運搬船、1艘の油送船、1艘の民間船が建造中であった。したがってKDRは2番目の国産空母が2017年に着工されるとは思わない。現在すでに10月である。

2番目の国産空母のトン数はどのくらいか？蒸気カタパルトを採用し、早期警戒機を載せることから、大連空母よりも大型の格納庫になることは想像できる。満載排水量は80000トン近くになる可能性があり、当時の米海軍キティホークに相当する排水量と予想される。

以上